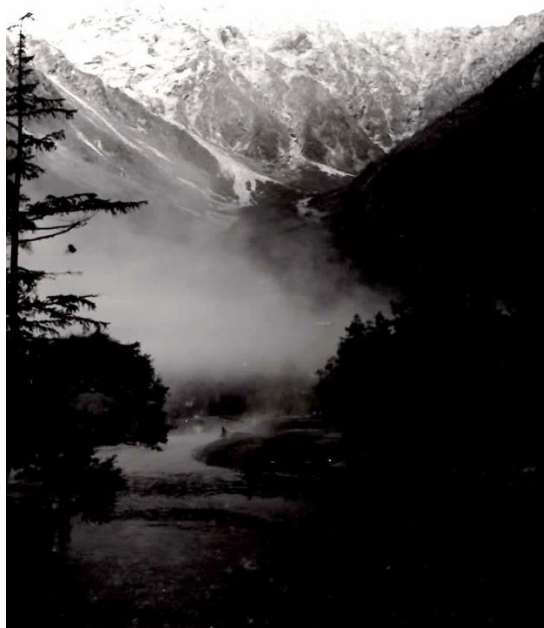


一章
穂高
回想

〈 朝もやの上高地から望む 新雪の穂高
1968年10月19日
〉



(1)初めての上高地・涸沢 (1967年10月 20歳)

初めて憧れの上高地・涸沢を訪ねたのは、大学2年の秋。

当時私はワンダーフォーゲル部(略してワンゲル)に所属していた。5月に涸沢に行った先輩から「新緑の上高地から涸沢に登り、そこから眺める雪の穂高は素晴らしい! まるで別天地みたい」と聞き、「私たちも行きたいね」と相談した。

前期試験も終わった10月4日、2年生ばかり4人で大きなザックをかついで夜行列車に乗り、翌朝上高地に着いた。河童橋から見ると憧れの穂高が峰々を連ね目前に聳えているではないか! 「夢のようだね」この時のメンバーは、河原・真田・小出・川崎(私)の4人。同級生パーティーの気楽さで山の歌を歌いながら梓川の岸辺でエッセンしたり、明神池でのんびりしたりして、1日目は徳沢園にテントを張った。

2日目、いよいよ憧れの涸沢を目指す。横尾から屏風岩を眺め、穂高の歌を歌いながら喜々として登る。ザックは重く涸沢までは時間がかかった。着いたのは夕方近く。「急いでテントを張って夕食を作ろう」荷物を開けて支度を始めた時、

小屋から放送が流れてきた。「奈良

〈河童橋から憧れの穂高を望む〉



女子大学ワンダーフォーゲル部の真田さん、いらっしやいましたら、至急涸沢ヒュッテまでおいでください」「えっ、今たしか真田さんって言ったよね?」「何かしら?」

ヒュッテへ行つた友はなかなか帰ってこない。どうしたのだろう? かなり時間が経つてから戻つて来た彼女は、目を赤くし悄然としていた。「父が急に亡くなつたの。兄から電話があつた。これからすぐに松本に下りれば最終列車に間に合うそうだから、私は帰る」思いがけない言葉に絶句した。だが、迷っている暇はない。彼女に付き添つて私が山を下ることにした。急きよ荷物をまとめている私達のただならぬ気配を察したのだろう。隣りのテントの東工大の学生さんが上高地まで一緒に下りてくれるという。なんてありがたいことだろう。まっ暗な山道を懷中電灯の明かりを頼りに無我夢中で下り、上高地からはヒュッテの人が手配しておいてくれたタクシーに乗り、何とか最終列車に間に合つて帰つてきたことだけは覚えていたが、ほかのことは思い出せない。夜行列車の窓際に顔を伏せてまんじりもしない友に、何と言葉をかけたらいいいのか・・・奈良に帰つてきて、寝袋やザックなど山の荷物を片付けながら、「穂高よさらば、また来る日まで」と、山で歌つた歌を口ずさんでみると涙が出た。友は急逝した父と対面して、どんな想いで今この時を過ごしているだろう。また涸沢に残つた二人も、紅葉を楽しむような気持ちにはなれず、大きな重いザックを背に山を下っている頃だろう。「できることなら時計の針を巻き戻して、1日前に戻りたい・・・」と切ない気持ちで、友の、私たちの、失われた時を想つた。

(2) 憧れの穂高縦走く蝶・大滝く徳本峠く島々谷へ (1968年10月 21歳)

大学時代前半の2年間、私はワングル部に所属した。仲間とともに山を歩き、苦楽を共にして充実した学生生活を過ごした。にもかかわらずワングルを止める決心をしたのは、1年の夏合宿後に椎間板ヘルニアを患い、大きなザックを背負って山を縦走するスタイルのワングル生活を続けることが無理だったからである。それでも山は諦めたくなかった。だから軽い荷物で行ける自分なりの山行きを求めていこうと決めた。こうして1968年夏、小屋泊まりの軽い荷物にして友人と二人で剣岳に登った。この山行きで山を続ける自信を得て、秋にめざしたのが穂高である。今にして思えば、なにも厳しい剣岳や穂高に登らなくても、もっと易しい山にすればよさそうなものだが、青春時代の山は「憧れの山」でなくてはならなかったのだ。また前年の秋に涸沢まで来たが、穂高には登ってなかったので、ぜひ登りたかった。

こないきさつはさておき、1968年10月19日、憧れの穂高を目指して、上高地から岳沢に登った。どの山に登る場合もそうだが、登山初日は、ラクしている日常生活から離れ、地球の重力に逆らって登るので苦しい。特に上高地から高度差約1600メートルを登るこの日は大変だった。初日で足が重く、前穂からの稜線に出る手前では足がつった。それでも一步一步上を目指して登る。日本第三の高峰である奥穂高山頂(標高3190m)に達した時は感無量だった。だが奥穂からの下りでも試験が待っていた。岩場で足の届かない個所があり、同行者に手で支え

てもらってスタンスを作り、どうにかその場を切り抜けることができた。現在は安全登山のために鎖や梯子が設置されているそうだが、当時は自然の岩場のままで苦労して越えた。夕闇の迫る頃によくやく穂高岳山荘に着いた。夜、山小屋から外に出てみると、山の冷気に身が引き締まり満点の星空が神々しいほど美しかった。

翌日は快晴。山にも慣れて気分も晴ればれ、うっすらと雪化粧した3000m穂高稜線を快い緊張感で一歩一歩登り、涸沢岳を越えて北穂高まで縦走した。北穂高岳(3106m)の頂上から眺めた360度の展望は、今も眼の奥に残っている。(写真 下)

北穂から先の稜線はグツと下り、大キレットを経て槍ヶ岳に続いている。北アルプスの山々が屏風のように連なっていて最高！これまでに見た山岳展望の中でも一番の感動だ。この写真を見るたびに穂高の稜線を歩いた時のわくわく感が蘇ってくる。

3日目は徳沢園から長堀山・蝶ヶ岳・大滝山を経て徳本峠までの縦走してきた穂高の稜線が樹林の間から垣間見える。新雪の槍ヶ岳・穂高連峰を眺めながら、かさこそと落ち葉を踏んで歩いた静寂の時間が忘れがたい。



〈北穂山頂から
北アルプスを展望する〉

「峠の宿」と看板のかかった徳本峠小屋は、いかにも往時の登山者が泊った雰囲気そのままだ。ランプの灯った山小屋で、小屋の主と泊り客たちは囲炉裏を囲んで山のよもやま話をした。食事は質素だが、古き良き時代の山小屋はそんな風だった。

4日目、山を下る日の早朝、峠小屋の周辺を散策した。蝶・大滝から歩いて来た道をまっすぐに行くと霞沢岳だ。樹林帯の山道をこのままずつと歩いて行きたい気がする。が、山の記念に木の実を拾って引き返す。小屋から明神の方に下ると上高地、今日はその反対方向に島々谷を下る。この道はかつて上高地が神の住む処「神河内」といわれ秘境だった頃からの古道である。沢沿いの細い道をどんどん下って行く。昔からの峠道だけに歩きやすいゆるやかな道だ。丸太の木の橋を渡るのがおもしろい。途中に「岩魚留小屋」という古い木造の建物があったが、やっている様子はなかった。かつて重い荷を背負って麓から登ってきた旅人にとっては、ほっと一服する所だったのだろう。黄葉の島々谷を下り、秋の穂高山行を終えた。

この山行では、4日間で、穂高縦走、蝶・大滝山を経て、徳本峠から島々谷を下るといいう長い



〈徳本峠 峠の宿
後ろに見えるのは明神岳〉

コースを歩き、ワンゲル時代よりも大きなスケールでもっと自由に山を楽しめた気がした。前半の新雪と岩稜の穂高、後半の静かな森と溪谷の道、その両方があいまって豊かな自然に触れた。山の頂きを目指して登るけれど、ピークが目的ではなくて、山に在る時間のすべてが自然と触れ合って過ごす山旅なんだと思えた。ワンゲルをやめて自分なりの山行きを求めていた私に、新たな山の世界を拓いてくれた。今も続いているわたしの山旅の原点ともいえるのがこの穂高山行である。手元に残っている当時の写真アルバムを眺め、山の記録や日記、人に宛てて書いた手紙などを読み返してみると、

「穂高の岩尾根を登り、晩秋の静寂の森を歩いた4日間がどれほど幸せだったことか——この美しい思い出を胸にいだいて、さあ、私は『これから』を生きていかなきゃ。」と書いてある。何とすがすがしい青春の決意だろう！

我ながら当時の自分がいとおしく、ほめてやりたい気さえする。この山旅がその後の人生を生きる宝になったことは確かである。山の記録をひもときこの本を書く中で、今、21歳青春時代の自分自身に出会うことができ嬉しい。



〈黄葉の島々谷を下る〉

(3) 新穂高ロープウェイの開通とチャレンジスキー (1973年2月 25歳)

神奈川県川崎市で小学校の教員となつて3年目、私に県外出張のチャンスが巡つてきた。障害児教育の先進地である滋賀県近江学園と京都府立与謝野海養護学校に行くことにした。同じ頃に駅で真新しいポスターを見つけた。「新穂高ロープウェイ開通、山頂駅から4キロのダウンヒルスキー」「ようし、このチャンスを生かさないと手はない!」と即決。出張に行く途中で名古屋駅のロッカーにスキー一式を預けて、滋賀と京都ではまじめに研修した。帰途名古屋駅でスーツ姿からスキーズボンに変身し、出張カバンをスキー道具に替えて、新穂高山麓の平湯温泉に向かった。

翌日は晴天に恵まれ、ロープウェイで山頂駅まで上がる。西穂から奥穂まで穂高の稜線が真っ白に輝き、快哉を叫ぶ! 冬の穂高を間近に眺められるなんて、これだけでも来た甲斐があつたというものだ。オープンしてまもないせいかな人も少なく、まずは中間駅の鍋平高原でふわふわの新雪を何本かスキーで滑る。午後は「せっかく穂高まで来たのだから・・」と山頂駅まで上つて4キロのダウンヒルコースにチャレンジすることにした。ちなみに私のスキー歴は就職してから始めたので3年目。もともと山が好きで、冬も山の近くにいたいと思つてスキーを始めたので、妙高、乗鞍、御岳など山の近くのスキー場で一番高い所までリフトで上がり、ゆっくりマイペースで滑り降りてくる経験をしていた。この時も「どうしてもだめならスキーを脱いで歩いて下ればいい」と思っていた。しかし、新穂高のきびしさは私の甘い予想をはるかに超えていたのだ。



(新穂高ロープウェイで上り
穂高を眺めてゴキゲンな私)

スキーコースは廃止されたそうである。このように、20代で訪れた憧れの穂高には、いつもドラマがあった。そして、それぞれが忘れられない思い出として心に残っている。

尾根を下る途中からしだいにコースの幅が狭くなって私のボーゲンでは精一杯。やがて片側が崖のように切れ落ちた危険な箇所に出た。横滑りで難所を過ぎようとしたが、滑落防止ネットにスキーの先が引っかかってしまい万事休す！慎重にスキー板を外して、危険な所を足で歩いて下った。全くヒヤヒヤものだ。

ようやく窮地を脱してあとは何とかスキーをつけて滑って降りた。最後の林間コースではやっと楽しんで滑れたが、午後はこの一本だけで終わった。宿に帰って聞くと、「そのコースは上級者向きの難コースで、国体のスキー選手が練習に滑る」とのこと。

先に聞いておくべきだった。あとにも先にも私の山生活の中で一番危なかったのがこの新穂高スキーである。大事に至らなかったからよかったようなもののこの一件では大いに反省した。それからはスキー場の情報を本屋で立ち読みしてでも事前

（４）年を経て、山旅の原点となった穂高を訪れる

涸沢の紅葉を訪ねて （2008年10月 61歳）

その後かなりの年月が経ち、定年後61歳の時、何と41年ぶりに夏の立山と秋の涸沢を訪れた。この時は夫と二人旅で、かつての倍近い時間をかけ、写真を撮りながらゆつくりと登った。涸沢はちょうど紅葉の最盛期で、ナナカマドの鮮やかな赤と黄や橙がカールに点在して穂高の岩峰と対照をなし「さすが！日本一の紅葉」と感嘆した。小屋に荷物を置き、見事な紅葉を愛でながらカールの中を一周する。穂高を見上げてザイテングラードから穂高岳山荘、奥穂へのルートを眼で追うが、登ることは計画してなかった。天気に恵まれて紅葉を満喫できたことに感謝！



その夜の涸沢ヒュッテは、大大大混雑で、1枚の布団を横に使って7人が寝るといふ信じられないすし詰め状態。寝返りはおろか身動きすることもままならず、蒸し暑さで結局一睡もできなかった。誰もが同じ頃「涸沢の紅葉」に憧れて来るのだから仕方ないが、あの小屋の苦行には二度と耐えられそうにない。翌朝、黎明の穂高を背に涸沢から下った。上高地でバスを待つ間、ゆつたりと穂高の峰々を仰いで、秋の涸沢への山旅を終えた。

穂高を眺め、徳本峠く島々谷を巡る山旅 (2016年10月 69歳)

さらに年を経て、60代も最後の年を迎え、行き残した山を思う年齢になった。紅葉期に行きたい山を想う。山の秋は早く、高山の紅葉の美しい最盛期は3、4日と、急ぎ足で通り過ぎてしまう。山には下界とは別の季節のカレンダーがあるのだ。北海道大雪山の縦走なら紅葉の最盛期は9月中下旬、みちのく岩手山を眺めながら八幡平からの裏岩手縦走と早池峰の秋に行くなら9月下旬く10月上旬、穂高を眺める山旅ならば、10月10日前後がよい。思いは巡るが、そういくつも行けるわけではない。思案の末に、私の山旅の原点となった穂高を眺め、徳本峠から島々谷に下る道を歩くことにした。20代と同じコースを歩くことは無理なので、新穂高ロープウェイで上がり、まだ登ってない西穂を眺める無理のないコースで歩こうと決めた。

2016年は夏から異常気象が続き、秋の山旅も大雨と台風の影響で2度も延期し、ようやく晴れた10月10日に静岡を出発。新幹線とバスを乗り継いで昼過ぎに新穂高に近づくと胸が躍る。12時半のロープウェイに乗り景色を眺めると、色づき始めた林の間に、かつてスキーで滑り降りた林間コースとおぼしき山道が見えて、ほうっと懐かしい気持ちになる。穂高を眺めながら中間駅まで上る。山頂駅に着いた時にはあいにく辺り一面霧の中、展望をあきらめ登山届を出して歩き始める。「体育の日」とあって、下りてくる集団の中には子どもたちの姿も多い。日帰り登山で登ってきたのだろう。「よくがんばったね」と心の中でエールを送る。今は親や指導者に連れられて来たのだろうが、いつか穂高を歩いたこの体験を思い出す時が来るかもしれない。西穂

山荘着14時55分。行ければ独標までピストンと考えてきたが、一面ガスで山の姿も見えないので、カメラとおやつだけ持ってぶらぶら歩きで散歩に出かける。西穂丸山(2452m)に着いてしばらくすると霧が晴れてきた。下方に上高地と梓川が見え隠れし、やがて目の前には登りたかった独標から西穂高山頂(2908m)が姿を現わす。秋の雲と青空を背景に穂高の岩稜を眺めながらエッセンして至福のときを過ごす。小一時間も山の風景に浸り、夕日と雲海と笠が岳のシルエットを眺めながら西穂山荘まで下った。独標まで登ることはできなかったが、青空と雲と夕日に彩られた穂高を眺める山の時間をすごすことができて充分満足した。



(秋の空と西穂の稜線を眺める)

翌11日、次の目的地の徳本峠に向けて上高地へ下る。

例年なら鮮やかな紅葉の樹林帯を下って行くはずだが、今年は夏の猛暑と秋の長雨のために、木の葉が秋を待たずに枯れ落ちてしまったという。紅葉の山を目指してきたのに何という巡り合わせか、残念！だが前後に歩く人もなく、ひとり静かに下る。上高地田代橋に下りると辺りの空気が一変、大勢の観光客と行き交いながら歩く。喧騒を避けて、梓川岸のベンチで西穂や霞沢岳を眺めながらエッセンする。ひとりだから自分の気持ちに素直にすごせるいい時間だ。



〈河童橋から望む穂高連峰〉

河童橋から望む梓川と穂高連峰は、年月を経ても変わることなく清冽な印象で、惜しみなく自然の造形の妙を感じさせてくれる。ワンゲルの4人で初めて来た時からもう49年も経ったのだ。

「昔は山の歌を歌って歩いたなあ」と思い出しながら、明神への平坦な道を歩く。落葉松が黄色に色づいていて秋山を感じさせる。脇の林でサルが2、3匹えさを探していた。12時に明神に着き、明神岳を仰ぎながら山靴を脱いでしばし足を休める。ひと休み後12時半、白沢出合から徳本峠をめざして秋の気配の漂う山道をゆつくりと歩き始める。ここから先も静かなプロムナード、数人とすれ違っただけで山の秋を味わいながら歩く。徳本峠に近づくにつれて、「昔の小屋はいついどうなっているだろう」とわくわくする。15時20分徳本峠着。新しく山小屋が立てられていたが、その入り口には、見覚えのある「峠の宿」の木の看板が掛かっており、旧山小屋は、有形文化遺産として昔のままの姿で保存されていた。懐かしさでいっぱい、記念写真を撮ってもらう。紅葉期でもあり、200名山の霞沢岳に登る人で山小屋には定員いっぱい、30名が泊り、旧小屋も使われていた。ランプも昔通り

へ48年ぶりの徳本峠小屋
手前が旧小屋、奥が新小屋



だったが、今は食事もよくなり小屋の人は仕事で忙しそうだった。往時の写真も携えていたが、小屋の主と登山客がよもやま話をするような雰囲気は、この小さな小屋にもなかった。時代が変わったのだろう。しかし、このマイナーな小屋に泊った登山者同士はそこそこで会話が弾み、名古屋の山の会で会誌をずっと発行しているという人や島根から初めて徳高に來たというグループの人と夕食後のひとときに山の話が弾んだ。翌日は霞沢岳に登って上高地から山を降りるといふ人がほとんどで、島々谷を下るといふ人は私を入れて4人だけ。夜はひとり1畳のスペースで、ゆっくり眠ることができた。1人1畳以上は泊り客を入れないのがこの小屋の決まりらしい。私も2度目の予定変更では、直前にキャンセルした人がいたから、ラッキーなことにか泊れたのだ。

翌12日もよく晴れて山の神様に感謝！徳高の峰々がご来光に染められてバラ色に輝いていくさまを眺めてシャッターを切った。東の方には雲海のかなたに八ヶ岳の山並みが見えた。峠の宿で朝一番に私が起きたのに、夜明けの徳高を眺めて写真を撮ったり展望台まで歩いて景色を眺めたりしているうちに、いつの間にか



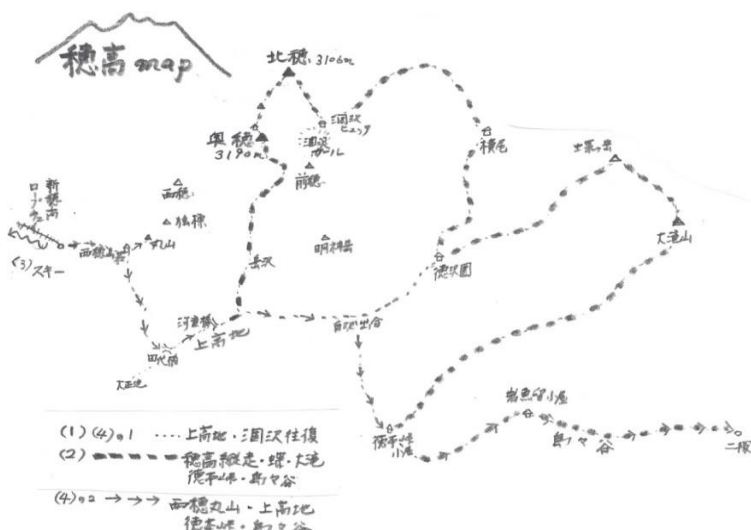
（徳本峠から望む朝焼けの
明神岳と穂高連峰）

登山者は次々と出発して行き、私が最後になってしまった。

そういえば以前にもこんなことがあったつけ。2010年秋に仙人池で泊った時も、星が瞬く未明に起きて朝日に染まりゆく裏剣の峰々をずっと飽きることなく眺め写真に撮っていたら山小屋を出発するのがビリになってしまった事を思い出した。だが好きな処で心ゆくまですごせるのがひとり旅の良さだ。

島々谷の下り道は、かつてのイメージのまま変わることなく歩きやすい溪流沿いの道だった。途中で何か所も沢を渡るためにかけられた木の橋は、昔は丸太を無造作に縛った橋が多かったが、今は歩きやすいように平らな板を打ち付けてあった。

岩魚留小屋が半世紀近くも変わらず昔と同じように残っているのも不思議なくらいだ。6時半に徳本峠を出発、5時間半で島々谷を下るまで、周りの木々は少し黄葉していて秋の気配が漂っていた。しかし二股から新島々までの川沿いの道では、まるで夏かと思うほど青々とした木々の緑だった。14時過ぎに新島々駅を出て帰途についた。紅葉は今ひとつだったが、晴天に恵まれ、60代最後のこの時期に行けてよかったと思う。



20代に
スキーで滑った
鍋平高原を
今年1月初めて
スノーシューで
歩く

♪
1 ワンゲル歌集より「穂高よさらば」
穂高よさらば また来る日まで
奥穂に映える あかね雲
かえり見すれば 遠ざかる
まぶたに残る ジャンダルム

2
涸沢さらば また来る日まで
横尾に続く 雪の道
かえり見すれば 遠ざかる
まぶたに残る 屏風岩

♪